

(第二十一章)

時が本性として有る理由を否定する>時は果が生起し失壊する因であることを否定する> [章の著述を説く]

言う。「時間等は有るのみである。何故かといえ、ある時に何処かで何か、生起と壊を具える故である。このように、もし時間等が無いとなれば、ならば、そう見れば違いは無いので、一切の時点で、一切より一切も生起し、壊れるとなるものであるが、そのようにもならないので、それ故に、時間等は有るのみである。」

章の著述を説く>生壊が本性として成立したことを否定する>起壊が本性として有るという主張命題を否定する>起壊は一緒であるかないかを考察して否定する> [主張命題を挙げる]

説く。もし、何かに生起と壊そのものが有るとなれば、時間等も有るとなるものであるが、

壊は、生起が無くしてか、
一緒にまさしく有るのではない。
生起は、壊が無くしてか、
一緒にまさしく有るのではない。 1

という時、もし、生起と壊が有るとなれば、互い（の一方）が無いのか？一緒になるのか？と問えば、双方の如くとも不合理である時、それらの理由を持つ時間等が如何様に有るとなろうか。

起壊は一緒であるかないかを考察して否定する>理由を示す> [失壊は生起と一緒である・一緒でないことを否定する]

「それは如何様に」といえ、

不合理である故であり、

壊は、生起無くして、
如何様に有るとなろうか。
生の無い死のように、
壊は、生起無くして無い。 2

このように、壊は生起無くして如何様に有るとなろうか。何かが起これば壊れるとなるが、基体が無く壊れるとはならない。例えば生があれば死ぬとなるが、生まれていないものに死は無いが如く、生起があれば壊れるとなるが、生

起が無く壊れるとはならない。

そこでこう、『壊は、生起とまさしく一緒に有るのであるが、生起無くしてではない』と思えば。

それに説こう。

壊は、生起と一緒に、
如何様にまさしく有るとなろうか。
死は生と同一時に、
まさしく有るのではないが如く。 3

このように、壊は生起と一緒に、如何様に有るとなろうか。その二つの意味が互いに合致しないものである時、その二つが一つと一緒に有ることは不合理である。例えば、死は生と互いに合致しない故に、まさしく同一時に有るのではないが如く、壊も生起と合致しない故に、まさしく一緒に有るのではない。

理由を示す> [生起は壊失と一緒にである・一緒にでないことを否定する]

言う。「仮に、壊は生起が無くとも不合理であるが、一緒であるとも不合理であるので、壊は無かったとしても、先ず、生起は有る。それが故に、時等も有る。」

説く。

生起は、壊無くして、
如何様にまさしく有るとなろうか。
諸事物において無常性は、
いつ時も無いのではない。 4

このように、生起は壊無くして如何様にまさしく有るとなろうか。諸事物において、無常性はいつ時も無ではないので、このように生起は、壊無くして、如何様にまさしく有るとなろうか。一切事物が無常性によって、無常に関係している時、諸事物において無常性はいつ時もまさしく無いのではない。

このようにもし、たった一刹那の事物が無常性と離れるとなれば、そのようであれば長期間でも離れるとなる。そう見てもまさしく恒常であるという背理となるので、それも主張しない。そう見るので、諸事物は常に無常性と関係す

るので、生起は壊無くしてまさしく有るのではない。

そこでこう、『生起は、壊とまさしく一緒に有るのであるが、壊が無くしてではない』と思えば。

それに説こう。

生起は、壊と一緒に、
如何様にまさしく有るとなろうか。
生と死は同一時に、
まさしく有るとは正しくないが如く。 5

このように、生起は壊と一緒に、如何様に有るとなろうか。その二つの意味が互いに合致しないものである時、その二つが一つと一緒に有ることは不合理である。例えば、生は死と互いに合致しない故に、同一時に有るのではないが如く、生起も壊と合致しない故に、一緒に有るのではない。

起壊は一緒であるかないかを考察して否定する > [それらの意味をまとめる]

それ故に、そのように尽く考察したならば、生起と壊は互いに無いか、互いに一緒に成立することは不合理であるので、

互いに一緒か、
互いに一緒ではなく、
成立したものは有るのではない。
それらの成立が、如何様に有ろうか。 6

生起と壊であるものが、互いに一緒か互いに一緒でなく成立したという、有るのではないそれらと別他の如何なる様相で成立することが有ると思うのか。そう見るので、生起と壊は有るのではない。それらが無ければ、時等が有ると何処でなろうか。

起壊が本性として有るという主張命題を否定する > 起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する >

[尽・無尽である拠所において起壊を否定する]

言う。「留まることが有るので、過失は無い。ここで生起と壊の間には住（留まる）が有る。住が有るので、生起と壊の何れかが無くとも有るのではないが、生起と壊は同一時であるともならないので、それ故に過失は無い。」

説く。それも不合理である。何故かといえば、諸事物は無常性と続いて関係するものであるので、如何なる事物も自らの住に一瞬たりとも留まらぬ故である。それ故に、

尽きたものに生起は有るのではない。

何故ならば、諸事物は無常性といつ時も離れず、常に無常性に従って関係する故に、尽きたとなる事物において生起はまさしく有るのではなく、生起が無ければ住が有ると何処でなろうか。

言う。「生起する時には尽きるとならないので、それ故に、生起は有る。生起は住（留まる）になり、住は後に壊れるとなる。」

説く。

尽きていないものにも生起は無い。

尽きたという性相と離れたものにおいても、生起は無い。何故かと言えば、事物ではない故である。このように、事物とは尽きた性相を持つものであるので、それ故に尽きた性相と離れたものは、まさしく事物ではない。事物ではないものにおいて如何様に起こるとなろうか。そこに「そのように起こるとなるだろう。」という世間名称そのものさえも無いので、それ故に、尽きていないものにおいても、生起は無い。

尽きたものに壊は有るのではない。

尽きていないものにも壊は無い。 7

そのように、何故ならば尽きたものにおいて生起は不合理であるが、生起が無ければ住（留まる）そのものも無い故に、この生起しておらず留まらない尽きたものに、壊失は有るのではないが、尽きていないものにも有るのではない。

尽きたものに有るのではないが、尽きていないものにも有るのではないそれら生起と壊が、他の何に有るとなろうか。そう見るので、生起も有るのではないが、壊も有るのではない。

起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する > [事物である拠所において起壊を否定する]

言う。「先ず、諸事物は有り、生起していないものが事物であるとは不合理であるので、生起もまさしく良く成立したのである。生起が有るものに壊も必ず有るので、壊もまさしく良く成立した。」

説く。何？君はビドラ樹の果実を欲しがるのか？君は、生起と壊が有るのではなく事物が有ると主張する。生起と壊を斥けたので、事物もまさしく斥けたのではないのか？

「それは如何様に」といえば。

何故ならば、

生起と壊無くして、
事物は有るのではない。

このように、もし事物のみが有るとなれば、それは生起する主体か？壊失する主体であるものか？と問えば、生起と壊が不合理である時、「事物は有る。」というそれが、如何様に合理となろうか。

事物が有るのではなく、
生起と壊は有るのではない。 8

そのように、何故ならば、尽く考察したならば事物そのものが不合理である故に、事物が有るのではなく拠所の無い生起と壊は有るのではないので、そこで「事物が有るならば、生起と壊もまさしく良く成立したのである。」と言ったことは、正理ではない。

起壊は如何なる拠所に有るかを考察して否定する > [空・不空である拠所において起壊を否定する]

また他にも、ここでもし、生起と壊が有るとなれば、それらは自性が空か、空でない事物に有るとなるか？と問えば、そこで、

空において、生起と壊は
まさしく合理ではない。

先ず、自性が空である事物において、生起と壊が有ることは不合理である。

何故かといえば、有るのではない故である。このように、自性が有るのではないものに、それらは何によって有るとなろうか。自性が有るのではない故に、「何かのこれである。」と、名称が付けられること自体も有るのではないところに、「何かが起こる。」「何か壊れる。」と、何が述べられようか。そう見るので、空であるものに生起と壊はまさしく合理ではない。

そこでこう、『自性が空ではない事物に、生起と壊が有る。』と思えば。

それに説こう。

不空においても、生起と壊は
まさしく合理ではない。 9

自らの我性として有るとなることが無い事物において、生起と壊が有るとはまさしく合理ではない。(何故ならば) このように、本性とは他へと変化しない故である。そう見るので、空でないものにおいても生起と壊はまさしく合理ではない。

起壊が本性として有るという主張命題を否定する > [起壊は同一か別かを考察して否定する]

また他にも、ここでもし、生起と壊が有るとなれば、まさしく同一か？まさしく他となるか？と問えば、そこで、

生起と壊が、
まさしく同一であるとは不合理である。
生起と壊は、
まさしく他であるとも不合理である。 10

先ず、生起と壊がまさしく同一であるとは不合理である。何故かといえば、このように、生起とは生じることであるが、壊とは滅すことであり、別の意味である故に、合致しないその二つが如何様にまさしく同一となろうか。

生起と壊は、まさしく他であるとも不合理である。何故かといえば、一切の事物は尽きる我性を持つものである故であり、このように、如何なる事物も一刹那たりとも無常性と離れることは無い故に、一切の事物は尽きる我性を持つものである。事物は、自性よりまさしく他であるとは不合理であるので、生起と壊がまさしく他であるとは不合理である。

そのように、何故ならば、生起と壊はまさしく同一かまさしく他であるとは

不合理である故に、生起と壊はまさしく不合理である。

生壊が本性として成立したことを否定する>起壊が本性として有る理由を否定する> [「見える」は理由にならない]

生起と壊は、
見ると君が思うならば、

君がこう『諸事物の生起と壊が、まさしく現前に見えるので、それについて他の如何なる道理が必要か。』と思えば、である。

それは正理ではない。何故かといえば、このように、

生起と壊は、
まさしく愚痴によって見られるのである。 11

愚痴が心を覆った不賢の者達は、『生起と壊が見られる。』とそのように思うが、生起と壊が見られるとは不合理である。何故かといえば、このように、もし生起と壊が有るとなれば、事物（に依拠するのか？）、あるいは無事物に依拠するのか？と問えば、それらの事物と無事物は有るのではない。それらが無ければ、拠所の無い生起と壊が見られると、何処で正しいとなろうか。

起壊が本性として有る理由を否定する>その理由を示す> [起壊は自らと同種・異種より生じることを否定する]

言う。「事物と無事物は如何様に有るのではないのか。」

説く。ここでもし事物と無事物が有るとなれば、それらは事物からか？無事物から生じるのか？と問えば、そこで、

事物は事物より生じず、
無事物は事物より生じない。
事物は無事物より生じず、
無事物は無事物より生じない。 12

そこで先ず、事物は事物から生じず、このように、壺は確実に留まる粘土より生じない。

『何を。壺は粘土を改造することより生じる』と思えば。

そのようであるとしても粘土を改造して滅したならば、壺が生じるので、事物が事物より生じるのではない。(何故ならば) このように滅して無いものは事物ではなく、事物と無事物は別義である故である。

もしまた、こう『粘土である事物そのものが壺である』と思惟すれば。

そう見るとしても、事物は事物より生じるのではない。(何故ならば) 粘土より他である他の事物が生じない故であり、粘土そのものを壺であると述べた故である。

そこでこう、『果物である事物は、樹木である事物より生じる』と思惟すれば。

それも適わない。何故かといえば、果物より樹木が他であるとは不合理である故である。そのように先ず、事物が事物より生じることは無い。

無事物も事物より生じることは無い。このように、壊れた壺は、確実に留まる壺より生じない。(何故ならば) 確実に留まるものに壊れることは無い故である。壊れた壺は、壺である事物よりも生じない。(何故ならば) 壊れて無いものは、事物が無い故である。

そこでこう、『事物が無い壺は、斧の事物より生じる』と思えば。

それも適わない。このように、もし無事物が斧より生じるとなれば、壺が無くとも生じるとなるだろう。もし無事物が生じるならば、無事物そのものにはならない。(何故ならば) 生が有る故である。「生」という何も無ければ、「生じる」というそれを、誰が信じるに適おうか。そう見るので、無事物も事物より生じることは無い。

事物も無事物より生じることは無い。このように、壺は滅した粘土より生じない。(何故ならば) 滅したものは無い故である。もし、滅して無い事物より生じるとなれば、そう見れば、事物が生じることは無因を持つものとなるので、それは主張しない。(何故ならば) 一切の時において一切より一切が生じる故と、一切の努めがまさしく無意味となる故である。そう見るので、事物も無事物より生じることは無く、無事物も無事物より生じることは無い。

このように、無事物は壺の無事物より生じない。(何故ならば) 壺の無事物とは壺が単に無くなったことであり、何も無い故と、生じさせられるものの意味とは何ものであるか、という故である。仮に、何も無いものが何も無いものより生じるとなれば、そう見れば兎の角も馬の角より生えるとなるだろう。もし、

無事物が何かであれば、何かである故に、事物そのものであるが、無事物ではない。そう見るので、無事物も無事物より生じることは無い。

その理由を示す> [事物は自と他より生じることを否定する]

また他にも、このように、もし事物が生じるとなれば、それは我からか？他からか？双方より生じるとなるか？と問えば、そこで、

事物は我より生じず、
まさしく他より生じるのではない。
我と他より生じることは、
有るのではない。如何様に生じるとなろうか。 13

先ず、事物は我（自）より生じることは無い。（何故ならば）自らの我性として有るものにおいては、再び生じると考察されることはまさしく無意味となる故と、限りが無くなる背理の過失となる故である。自らの我性として無いものにおいては、「我より」という言葉さえも不合理である故であり、そう見るので、事物は我より生じることは無い。

事物は他よりも生じることは無い。（何故ならば）生じておらず無い事物において、他は不合理である故である。このように、何かの有れば他も有るとなるが、それも無い。それが無ければ、他が有ると何処でなろうか。もしなるならば、まさしくそれが事物であるので、その有においても生じる為に何をしようか。（何故ならば）生じると考察したことはまさしく無意味となる故である。そう見るので、生じていないので他は無いのみである故に、事物は、我と他よりも生じることは無い。（何故ならば）斯くも示された二つとも過失の背理となる故である。

そう見るので、事物とは双方よりも生じることは無い。我と他と双方より生じることの無いそれらの事物が、他の何から生じると思うのか。

そう見るので、事物は不合理である。事物が有るのでなければ、何の事物が無いとなろうか。事物と無事物が有るのでなければ、拠所無くして生起と壊が如何様に有るとなろうか。

章の著述を説く> 生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す>

[事物が本性として有ると承認すれば、恒常と断滅になるさま]

また他にも、

事物が有ると承認したならば、

恒常と断滅の見解となる
背理となる。その事物とは、
恒常と無常になる故である。 14

事物であるとの見解が有れば、他のこの大きな過失ともなる。何故ならば、その事物が有ると承認したならば、恒常と断滅の見解である背理となるだろう。

如何様にといえば、このように、その有は恒常と無常である故であり、その事物であるものが有ると承認すれば、それは恒常か無常となる。(何故ならば) それより他には不合理である故である。

そのように先ず、もしその事物が恒常であるならば、恒常である過失の背理となるが、あるいは無常であるならば、断滅である過失の背理なるので、それも主張しない。(何故ならば) 大きな過失である故である。

生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す>そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する> [本性として成立したことを承認して恒常と断滅を斥ける論法]

言う。

「事物が有ると承認したとしても、
断滅にならず、恒常にならない。

このように、事物が有ると承認したとしても、恒常の見解の背理ともならないが、断滅の見解の背理ともならず、君は仏説を明らかに知らぬので、そのように思惟するに過ぎない。このように、もし事物が有ると承認したならば、恒常と断滅である過失として背理になるならば、そう見れば、有(輪廻)が不合理になる。何故かといえば、恒常とは確実に留まる故と、断滅は(有に)入らぬ故である。事物であるとの見解が有ろうとも有(輪廻)は合理であるので、それ故に、恒常と断滅の見解の過失である背理とはならない。それは如何様にといえば、

果と因の生起と壊の、
その継続が有である故である。 15

このように、果と因の生起と壊の継続であるものが有(輪廻)であり、そこで、何故ならば因が壊れるとなる故に、恒常の過失である背理とならず、何故ならば滅しつつある因より果が生起するとなる故に、断滅の過失である背理にならない。それ故に、そのように事物が有ると承認したとしても、有(輪廻)

は有る故に、恒常と断滅の過失である背理にならない。」

そのように承認しながらもその過失を斥ける返答を、否定する>それを否定する返答>

[継続を承認しようとも恒常と断滅は斥けられない]

説く。

もし、果の生起と壊の
その継続が有であるとなれば、
壊に再び生じることは無い故に、
因は断滅する背理となる。 16

もし、果と因の生起と壊の継続であるものが有（輪廻）であるとなれば、そう見るとしても、君にとっては断滅のみとなる背理となる。何故かといえば、壊に再び生じることは無い故であり、このように、滅した因にも再び生じることは無い故である。そのように、滅した因に再び生じることは無い故に、因は断滅するのみである背理となるだろう。

言う。「ならない。因より果はまさしく他ではない故である。このように、因より果がまさしく他であるとは不合理である。君も

『何かに依拠して何かが起こる。それは先ず、まさしくそれではない。

それより他でもない故に、それ故に断滅ではなく、恒常ではない。』¹
と言ったので、然れば、因より果はまさしく他ではない故に、因は断滅するとならない。」

説く。吾輩はそうは言ったが、君はその拠所である真如を理解していない。このようにもし、事物が滅し事物自体が生じるとなれば、その二つは、まさしくそれ自体か、まさしく他であると如何してならないのか。このように、もし先ず、因が因の時点を経て果の時点へと移行するとなれば、そう見れば、まさしくそれが因であり、その時点が他や他へと変化するのみに尽きる。例えば、踊り子が他の衣装を捨てて他の衣装を受け取ることは、まさしく別の衣装に変化するのみに過ぎず、別人ではない踊り子は、衣装が別になろうともまさしく彼女自身が踊り子であるが如く、他の時点へと既に移行したとしてもまさしくそれが因であれば、如何様に（因）そのものであるとならないのか。

もしまた、こう『因とは他の時点へと移行せず、因は滅すとなり、因が滅し

¹ 「何か…ない。」:『根本中論』第 18 章 10 偈。

たならば果が生じるとなる』と思惟すれば。

そう見るとしても、他が滅したうえで他が生じた時、如何様にまさしく他であるとならないのか。

我々においては、事物において、依拠して名付けられた、自性が欠如する、幻や逃げ水や映像のようなものにおいて、その事物は何のものとなろうか。その事物は何より他となろうか。まさしくそれ自体や、まさしく他であるとなることは無い。

そう見るので、事物であるとする見解が有れば、滅した因は再び生じることが無い故に、継続が断滅するのみの背理となるだろう。

また他にも、

事物は自性があるならば、
無事物となることは正理ではない。

事物が自性として有るならば、自性が有るものは、事物が無くなるとは正しくない。何故かといえ、本性とは他へ変化しない故である。それ故に、事物であるとする見解が有れば、因も滅すとは不合理であるが果も生じるとは不合理であり、生と滅は否定したものである故に、そこで恒常のみの過失である背理となるだろう。

また他にも、

涅槃の時には断滅する。
有の継続が良く寂滅する故である。 17

涅槃²を得た時には阿羅漢の有（存在）の継続は良く寂滅する故に、断滅のみの過失でもある背理となるだろう。そう見るので、その有の継続を有ると考えるとしても、恒常と断滅のみの過失である背理となるだろう。

² 涅槃：ここでの意味は無余涅槃^{おほん}といい、有為の継続の残余の無い涅槃。阿羅漢が解脱を得たのち、亡くなった状態。無余涅槃^{むよねはん}を得て、身体だけでなく意識の継続も無くなると主張する説と、身体を離れても解脱を得ている意識は断滅しないとす二説ある。ここでの対論者は前者。

それを否定する返答> [継続そのものが本性として成立していないと示す]

言う。「先ず、有の継続は良く成立した。涅槃を得た時には阿羅漢の有の継続が退転することは、我々を批判しないので、涅槃を得た時にはそれが断滅するとなっても構わない。」

説く。君の「有の継続が有ろうが、恒常と断滅の過失である背理とはならない。」と言ったこと自体も、吾輩が「有の継続が有っても、恒常と断滅のみの過失である背理となるだろう。」と既に良く示した。

先ず、「有の継続は良く成立した。」と言ったことも正しくはない。有の継続とは、如何様にも不合理のみである。何故かといえば、このように、

滅したとなった最後は、
最初の有に結生するとならない。

現在の有の終末の心が、最後の有である。未来の有の心が生じる最初が、最初の有である。そこで先ず、滅した最後の有は、最初の有と結生することは無い。(何故ならば) 滅した最後の有は有るのではない故である。このように、滅して無い事物より、如何様に事物が生じるとなろうか。もし、最後の有が滅したとしても最初の有が生じるとなるならば、そう見れば最初の有は無因より起こるとなるので、それは主張しない。(何故ならば) 多くの過失の背理となる故である。

そこでこう、『滅していない最後の有が、最初の有と結生する』と思えば。

それに説こう。

滅したとならない最後は、
最初の有に結生するとならない。 18

滅していない最後の有も、最初の有と結生することは無い。何故かといえば、二つの有である背理となる故と、無因より起こった過失である背理となる故である。

言う。「滅した・滅していない最後の有は、最初の有と結生することは勿論無いだろうが、しかしながら滅しつつあるものが結生する。」

説く。

もし、最後が滅しつつある時、
最初が生じるとなるならば、
滅しつつあるとは一となり、
生じつつあるも他になる。 19

もし、滅しつつある最後の有が最初の有と結生するとなれば、滅しつつあるとは半分滅した故と、生じつつあるも半分生じた故に、その二つが二つの有である背理の過失となる。(何故ならば)「滅しつつある」と「生じつつある」が有る故である。

生壊が本性として成立したと主張すれば、恒常と断滅の過失であると示す> [そのように否定した意味を要約する]

言う。「『滅した・滅しつつある最後の有は、最初の有と結生することは無い。』というそれが吾輩に何をしようか。有るならば先ず、最初の有の生は有り、それが有るので有の継続も合理である。」

説く。

もし「滅しつつある」と「生じつつある」が、
一緒に結生することも有るのでなければ、
死ぬとなる或る蘊において、
それに生も起こるとなる。 20

「一緒に結生することも」という「も」という言葉は、滅した・滅していない(最後の有)も含む意味である。

もし、滅しつつある最後の有が、生じつつある最初の有と一緒に結生することも有るのではなく、滅した最後の有も最初の有と結生することは有るのではない。しかし、滅した最後の有も最初の有と結生するのではないながら「最初の有の生は有る。」といえ、そう見れば、或る蘊において死ぬことになるそれらのみにおいて、生も起こる背理となる。(何故ならば)他の生は不合理である故である。それも主張せず、そう見るので、その三つ以外に有が生起するとは不合理である。

そのように三時においても、
有の継続が正理でなければ、

三時において無いもの、
それが如何様に有の継続となろうか 21

それ故に、そのように尽く考察したならば、滅した・滅していない・滅しつつある最後の有が最初の有と結生するとは不合理である故に、三時においても有の継続は正理ではない。三時において無いものである有の継続が、如何様に有の継続として合理となろうか。

有の継続が有るのでなければ、生起と壊が有ると何処でなろうか。

生起と壊が有るのでなければ、君の時間等が成立すると、何処でなろうか。

時は果が生起し失壊する因であることを否定する > [章の名を示す]

「起壊を考察する」という第二十一章である。